

# 蓬萊町だより

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

日会部 15町化  
号 11蓬文  
八 16年  
第 16者者  
成行集  
平発編

前書き、「蓬萊町だより」に長年、隨筆を寄せていただいた「上野靜」氏が永眠されて一年余となりました。蓬萊町の隣、弥生町に住み、この近辺の戦中戦後を身を持って体験された氏は、江戸後期に書かれた根岸守信の「瓦袋」にもまさる隨筆を数多く残されました。小生の手許にまだその幾つかが遺族から届けられております。今回はその中の一つを数回に分けて取り上げます。池田暉 記

## 本郷台に咲いた焼跡文化の花

(その一)

日本隨筆家協会々員 上野 靜

今次大戦の戦火に依る瓦礫の本郷台の一角、東大農学部前の角地、高崎屋酒店を軸に左側が旧中山(仙)道、左側が旧岩槻街道である。その中山道が白山通りに抜ける中央部少し先、左側に奇蹟的に戦火の洗礼を免れたデカタンズ、大正ロマンの名残を留める古色蒼然とした平屋建ての関本木炭商、瀬戸物商、砥(研)師など三軒ほど(現在は巨大なマンション)が焼け残っていた。

その前右側は当時、付近一帯が丸焼けになった空地(現在は無蓋の広い車庫)に昭和二四年頃大衆演劇の中村座が焼跡文化の狼煙をあげたのである。

一面が焼野ヶ原と化した本郷台も旧住民が徐々に疎開先から引き揚げてきたり、新たに焼跡地を捜し求めて家屋を新築、新生活を再会した。しかし、木材、建築士の少ない時代で殆どが仮建築で先ずは取り敢えずといった小屋だった。しかし、戦火の爪跡は凄絶、惨憺として何れの道路も凸凹道で荒れ放題のまま、根津神社の森に至るまで焼け残った二、三軒の家屋を除き一面が瓦礫の焦土の殺伐とした広い空地だった。白堊(当時)の日本医科大學は無論のこと、根津神社の森から東大農学部キャンパスに至るまで大小の残塊を通して一面が丸見えだった。

自動車も希に通る程度、路面電車もメチャ滅茶のダイヤで長時間の間隔で走っていた。従って二酸化炭素の排ガスは殆どゼロ、輿音も断絶的に聞こえる程度で殆ど死のマチと化していた。

遙か西南の彼方に目を遣ると僅かながらも富士の山頂を見ることが出来たのである。夜ともなると無数の星が果てしなく広い円形の大宇宙に星屑のようにピツシリと光り輝き、その中を時々流星が矢のようなスピードで落ちてゆく。こんな天空の劇的ドラマの演出は

今日の東京では想像も出来ない素晴らしい感動の光景だった。

夕闇が迫ると根津神社の森に住み着いた多数の蝙蝠達が森から出てきて薄暗がりの空間をパタパタと羽音を立てて飛び交うのである。そのさまは、とても東京のド真ん中の出来事とは思えず、恰も過疎の山村のジャングルの山野を思い出す風景だった。

私は戦後二年目に根津西須賀町(現在弥生一丁目)に小家を建てて一人で住んでいた。真夜中に突然、目が覚めると様々な出来事が頭の中をオーバーラップし、無人島にいるような不気味な恐ろしさが身に迫る思いだった。一寸した物音でも時にはヒヤリとし肝を潰すほど怖かった。

白堊(当時)の日本医科大學も戦火を被って半壊状態で白壁の窓は戦中、爆撃されたことを装って黒煙を画いていたのが当時もそのままになっていた。現在の渡り廊下で繋いだ新館は当時、専修商業學校(専修大学とは無関係)のキャンパスだった。それも丸焼けになつて凄絶な残骸が此処、彼処に散乱していた。娯楽といえれば各家庭とも殆どが戦火の中から漸く持ち出したラジオを聴く程度で外に何もなかった。

無論、新聞の配達もなかった。そんな時だった。

冒頭に記述した中村座の一座がやってきた

のである。……無論、掘つ建て小屋の芝居小屋で文字通り、ドサ回りの村芝居の一座である。娯楽施設の何もない時代だった。

住民達は乾ききった焦土に水を得た樹木のように生き、生きとし、喜びに沸き立った。男も女も、若者も老人も子供も夕食もそこそこにワンサと押しかけたのである。

一座は子供（チビ役）を含めて十数名だった。楽器もオンボロながら、クラリネット、大小のドラム（太鼓）、アコージョン、ギター、バイオリン、三味線など一通りを揃えていた。その中でクラリネットは古ぼけてはいたが水際だった美しい音色で絶叫するような音声で芝居小屋独特の雰囲気を出していた。他の楽器もいずれも使い古したものらしく余り美しい音色を出していなかった。

従ってクラリネットが芝居全体を取り仕切り、高低の音色を織り交せて際立たせ、景気付けに大きな役割を果たしているようだった。芸題は大衆演劇のことで種々様々だった。時代劇（チャンバラ、新派、漫才戦前型）、喜劇コント、歌謡ショーなど多種多彩だった。座長は中村八重子、副座長はその主人らしい中村勘三郎、何れも三五く四五才位でファイリングのよく合った二人だった。

中堅役者は二〇才く三〇才位で娘達が半数以上（男役もこなした）。チビの子役は男女二く三名のようだった。

一座のスター中村ナナ子は二二く三才。面長で眉目秀麗、絶えず微笑みを浮かべ、スラリとし、当時としては最先端をゆくファッションスタイルの美女だった。

彼女が剣劇で数名の追っ手に囲まれ、素晴らしい立ち回りでバツタ、バツタと薙ぎ倒し、観客席に顔を向けてニッコリ笑う、笑顔には華やかな女の美しい魅力があつて観客席は大はしゃぎで沸き立った。

拍手と喝采の飛び交う中、彼女へのご祝儀として此処、彼処から五〇円、百円（当時）何個か包んだ紙包みを舞台に投げ込んでいた。中には札ピラを何枚か重ねて投げ込む熱狂的なファンもいた。

彼女は美人である上に芸達者で得意の殺陣は段平の激しいアクションで旅役者としては最高の美技と見られていた。

多数ファンの中には熱狂的で一座に旅鳥のように付いて回った「追っかけファン」もいたということだった。

当時、二〇代の若かった私も彼女の一ファンで可愛げのある笑顔と美しいスタイルと素晴らしい殺陣に、酔い痺れて感動、中村座のシルエットのようによど毎夜駆けつけたものだった。一座の十八番は新派の戦記物だった。

戦死したとばかり思っていた老夫婦の前に某日、突然、長い戦地生活で痩せ細り衰え果ててポロ服を着た旧日本兵の哀れな姿で現れ

た、我が子を見て悲しみに嗚咽、慟哭し、抱き合うシーンは、なお、戦争の余韻が残る時代だっただけに感動的で観客席の涙を誘ったものだった。

一座は西は遠く九州、四国、関西方面を軸に東は仙台、福島あたりを回り、文字通り、日本全国を跨にした旅から旅への渡り鳥だった。全座員には中村姓を名乗らせ、ファミリー一家のように心暖かい一族で纏まっているように見えた。しかし、風説では口減らしの為に座員になったり、前借りで一家の犠牲になつて入団した役者もいるということだった。

無論、リハーサルは厳しく、多数の役者が血を流したり、生傷の痕を見たという話も聞いた。……こうしたことは独り中村座が行き過ぎていくという訳ではなくこの社会の極く普通の扱いで常識化されているようだった。

劇中、時々、トチツたり、所作の緩慢な役者達を見かけたことがあるが連日の激しいレッスンの繰り返しで疲れが出ているようだった。

華麗な劇団ではあつても舞台の裏では絶えず、鞭や叱咤が激しく飛ぶのだ。無論座長としては芸の上達、劇団の名誉を重視しての愛の鞭であり、激励の叱咤であるに違いない。

私はフト、彼の昔、一世を風靡した物悲しいリズムに乗って唄われた流行歌謡曲、渡り鳥『サーカスの詩』（西條八十作詩）を思い出したのである。

旅の燕<sup>ツバメ</sup> 淋<sup>しみ</sup>しかないか

俺も淋しい サークス暮し

トンボ返えりで 今年も暮れる

知らぬ 他国の 夢を見た

私はサーカス団と重ね合わせて役者達、共通の苦悩を認識、胸の内では彼らを憐れみながら愛情の心を以て励ました。

何時も舞台では微笑を浮かべ爽やかな芸風を見せる一座のプリマドンナ・ナナ子も例外ではない筈である。

「ナナ子よ！ 何事も辛抱が大切だ。苦しみに耐え抜き芸域を拡げることだ。さすれば結果が必ず出る。況してナナ子はトップスターだ。やがて光り輝く春はキツと来る」

と、私は心の中で彼女にファンとしてのステートメントを発信していたのだった。

一座の芝居は一月程度のロングランだった。ドサ回りを終わって、ここ本郷、中村座に姿を見せるのは一年に二、三回の間隔だった。

ファンは長い時空を待ちに待ち、漸くその日が来ると喜び勇んで空き家になっていた中村座に駆けつけるのだった。そしてみんなで掃除、片づけ、整理など、開演の準備を手伝うのが慣習になっていた。

無論、全員がボランティアで一生涯懸命に働くのだった。

その間、副座長は若い女優二、三名を伴って高々とクラリネットを吹奏し、辻々で

「職員の皆様さま、お待たせしました。」

再び、帰って参りました。明日より開演致しますので、どうぞや、ご来場のほどを伏してお願致します」

と、一場の口上を述べ、巷々を宣伝、回っていった。

宣伝隊の行く先々では熱烈なファンが巷に出て喜びの拍手で迎え入れるのだった。

何時もながらの初日は超満員で観客は場外に溢れていた。

かくて本郷台の一角から中村座が威勢よく、赤々と焼跡文化の第一灯を点火したのである。ファンは三、四〇代を中心とし、中には六七〇代のお婆さん連中もかなりいたようだった。遠くは湯島、水道橋、小石川、巢鴨辺りから熱烈なファンが駆けつけていたということだった。かくて中村座は本郷文化の先駆けとして多数ファンの護送船団に守られて華麗に花開き盛況を続けて行った。

観客の中には娯楽の少ない当時のことで大学教授や小中学校の教師や一般サラリーマンなどのインテリ階級も多数が観劇、中村座は焼跡文化のシンボルともなり、大きな存在感を明らかにしたのである。

雨の日も風の日も多数のファンが引きも切らず、駆けつけ、ひしめき合って大入り満員の

の盛況が続くのだった。

この頃、中村座の焼跡文化の高揚と盛大な人気がモチベーションとなり、戦禍に遭って失った長い歴史を誇った本郷座(旧春木座、本郷警察署や本郷消防署前の春木町大通りの中央右側に所在していた)の復活、再建の声が日本郷座のファンの中から燃え上がった。

本郷座は戦前、神田、駿河台、御茶ノ水、本郷地区唯一の映画館としてインテリ階級から絶大な支援を受けて本郷文化を植えた華々しい歴史に輝く有名館だった。しかし、春木町周辺の焼跡の復興が遅れ、第三セクターの各リターダ―格や最も熱意を示した文化人、その他旧来のファン達の結束が困難で資金の目処が付かぬまま本郷座の文芸ルネッサンスは曙光も見えず、不発に終わってしまった。早くから本郷台の香豊かな文化の土壌を見透し、逸早く、手を挙げた中村座の基盤は強固で揺るがなかった。

無論、中村座としても本郷座にライバル意識はなく共に文芸復興に活動する同志として再建の不発を心から惜しんだ。

かくて一座はファンと共に焼跡文化の確立に邁進し、中村座は愈々成熟期の本番に入っていたのである。「好事魔多し」というか：：：そんな全盛期を迎えた中村座が突如、思いがけないハプニングに見舞われたのである。

(次号に続く)

# 町会活動の概要

平成十六年六月から  
平成十六年九月まで

## 総務部

- 16年 6/5 蓬萊町会定時総会(於かねこ)
- 6/8 祭礼準備委員会  
(15日、26日同じく)
- 7/15 文京つづじ会総会
- 7/27 祭礼準備委員会(6日同じく)
- 8/4 祭礼準備委員会(10日同じく)
- 9/18 18、19日根津神社祭礼

## 婦人部

- 16年 6/21 清掃事業協力会総会  
優良会員表彰 宮下登志子様  
鈴木 周子様
- 7/8 日赤奉仕活動
- 7/9 大観音千成りほろずき市手伝い
- 7/23 根津神社つづじ苑除草
- 8/5 婦人部会議 15名参加
- 9/6 敬老犬ぶら会手伝い 7名参加

## 防犯部

- 16年 6/12 防犯パトロール 9回 小山氏
- 9/10 駒込防犯協会全体会議

## 交通部

- 16年 9/2 駒込交通安全協合理事会
- 9/21 秋の全国交通安全運動  
街頭指導 かねこ前交差点

## 平成16年度

### 根津神社祭礼収支報告

収入(協賛金)合計 一、九五六、〇〇〇円  
支出 計 一、九一八、四五五円  
差 引 残 二七、五四五円

※再来年 平成十八年は根津神社が現在地に遷座されて三百年に当たります。元々は団子坂の上、現在「萩風荘」のある裏側に在りました。現在地は甲府宰相徳川綱重の下屋敷跡で五代將軍綱吉の嗣子となった六代家宣が生まれた生誕の地です。宝永三年に下賜され、宝永五年(一七〇八年)に遷座しました。神社では数年前から三百年のお祭りを記念すべく氏子中と計って準備を進めています。  
三百年祭が賑わしく執行出来ませう様ご協力下さい。



## 計報

高村 竹雄 様(九三才)	向丘 2-38-9
吉田 劉 様(九二才)	向丘 2-14-2
福井 三郎 様(八〇才)	向丘 2-25-6
宮下 芳夫 様(六五才)	向丘 2-18-7
福島 三恵 様(七八才)	向丘 2-30-8

## 蓬萊句壇

角帯を結びて過ごす夜の秋  
懐かしき探偵小説鳥屋敷  
さりげなくアタムの如くバナナむく  
竹籠に挿せば踊れり猫じゃらし  
秋半ば新屋の夕餉あたたく  
来年も生きてるつもり日記買う  
天の川星を掴んで見たくなり  
右ひだり揺らく小菊のたけくらべ  
コーヒーとバナナを好みラテン聴く  
葛かずら社の風雪を共に耐え  
噴水や夜の帳を彩りて  
幸不幸遠く離りて天の川  
朕と云う言葉も死して終戦口  
縣崖の菊が目じるし御師の宿  
※蓬萊句会は毎月第二土曜日に(原則として)開いております。俳句に興味のおありの方は気軽に見学に来て下さい。  
お問合せ 小野向雪(たばこ屋) 向丘2-11-8  
電話三八二七-八六五七番へ

## 編集後記

何十年ぶりの猛暑に加えて史上稀な台風の襲来、さらに追い打ちをかける大地震、被害を受けた方々の悲嘆、ご苦難、お察しするに余りありません。一日も早い復興を祈って止みません。天災人災、防災には常にご用心。

編集委員 三宅栄三 竹中俊之 常岡裕  
青木喜一 池田暉